

書評「京大地理学者、なにを調べに辺境へ？」

木谷 幹一

大阪市立淀川中学校 kankitani@nifty.com

キーワード：アジア、アフリカ、フィールドワーク、好奇心、生きる力

(受付：2025年1月26日)

著 者 水野一晴

発行所 ベレ出版 2024年4月25日 初版発行 398頁

定 価 1,700円（税別）ISBN978-4-86064-763-6

私の畏友で、高所旅行者というのがいる。氏は大学卒業後、まともな地図を持たずに成都？からチベットまでヒッチハイクと徒歩で旅したという。その後も毎年のようにチベットの巡礼地各所を巡回して、何度も死の恐怖を体験してきたそうだ。この事実を、一昨年、京都堺町画廊での講演で初めて知った。彼と私の共通点は、幼少期に白血球の量が多かった時期があったことと、広島カープファンであることだ。これらのことを知ったのもごく最近であった。彼は今も健在である。この人と同じ匂いを、本書から感じたので手に取ることにした。

本書は、「はじめに」から始まる24章から構成される。01章「ブレーキの壊れたルノーで調査」。最初から刺激的なタイトルである。これが本書の面白さを如実に表している。カメルーン北部の地質と住居の話では、家造りには、その地区の地質が関係していたということがまとめられている。まさに文化地質学的な観点である。京都府北部でも、廃村化過程で地質が関係していたという話を地団研京都支部例会で聞いたことがある。08章は、ゾウの鼻で身体を吹き飛ばされても調査を続ける院生の話である。ゾウの怖さを実感した。このようなトラブルに巻きまれても、調査を続ける院生の勇氣と真面目な態度には、敬意を表する。09章や10章では、海外旅行保険について述べられている。海外に出かける時は、必携であることを実感した。実体験が海外旅行保険のPRにもなっている。最後の24章には、人口100万人以上のナイロビ最大のスラムには公立学校が1つもないことが記されている。

非常に多くの地域でフィールドワークをしていると、大けがや大事件に巻き込まれることは想像に難くない。そして、それら事実が生き生きと語られているので、最後まで興味関心を途絶えさせられることなく、読み進められた。

あまり細かく書いてしまうと、読み手の楽しみを奪うことになるので、ここでは省略することにした。

まさに行動は美德である。ぜひ読んで欲しい1冊である。